

テイドに関する一考察

——クライとの比較を通して

川崎一喜

◆要旨

本稿では、事態の程度を説明する際に使われるテイドを対象に、その使用実態及びテイドが示す程度の高低を、コーパスを用いて観察し、その特徴並びに類似表現であるクライとの相違点について考察を行った。調査の結果、テイドは様々な程度を表すクライとは異なり、低程度に偏ることが明らかになり、文中のクライとテイドを入れ替えると、意味が異なってくる場合があることがわかった。さらに、テイドを用いた文には、事態の価値が低いと見做す、話し手の否定的な感情・評価の意味が読み取れるものが多いこと、否定辞を補部とするテイドニの文には、事態を適切と思われる範囲内に留めるといふ話し手の要求的意味を表すことがあることについても指摘した。

◆キーワード

テイド、クライ、低程度、否定的評価、限度

◆ABSTRACT

This paper observed usages of *teido*, a degree expression in Japanese, using a corpus to identify the characteristics of the expression and differences from a similar expression *kurai*. The results have shown that unlike *kurai*, which can be used for various degrees, *teido* tends to be used to express a low degree, which means they are sometimes uninterchangeable in meaning. Also pointed out that *teido* sentences often express the speaker's negative feelings and assessments, and *teido-ni* sentences complemented with a negative postfix have been observed to express the demand of the speaker to limit the situation to a scope deemed appropriate to the speaker.

◆KEY WORDS

Teido, *Kurai*, low degree, negative assessments, limit

A Study on Degree Expression *Teido* With Comparisons to *Kurai*

KAZUKI KAWASAKI

1 はじめに

1.1 問題の所在

「程度」という語は江戸後期から規範という意味で使用されるようになり^[註1]、現在は実質名詞（内容語）として、(1)abのように当該事態のレベル、度合いという意味で用いられる。

- (1) a. この学校は非常に程度が高い。
b. 相手の知識の程度を考慮して話をする。

一方、(2)abcのように、程度、概数用法のクライ^[註2]と置き換えが可能な「程度」がある（以降、文の容認性について、()内の無印は自然であり置き換え可能、*は不自然で置き換え不可能、#は語用論的に問題がある、?はやや不自然を表す。判断は筆者の内省による）。

- (2) a. 英語力は大学卒業程度（くらい）が望ましい。
b. 過労死しない程度（くらい）に働いた。
c. 3メートル程度（くらい）のロープを用意する。

(2)abcの「程度」は(1)のような実質名詞とは言えず、クライのように句を構成し、当該事態の程度がどのようなものかを補部で表している。(2)cのように数量詞に接尾語的に付き、おおよその数量を表すものも非常に多く、クライと同じように使える。しかし、「程度」は常にクライと同じように使用できるかと言うと、次の(3)abのように不自然になるものがある。(3)bは「程度」を用いると文法的には正しいが、状況によっては大変失礼になってしまう。一方、(3)cは、クライがやや不自然になる。

- (3) a. 過労死するくらい（*程度）働いた。

- b. お宅にもこのくらい（#程度）のお坊ちゃんがいらっしゃいますよね。
c. 実例を、差し障りのない程度（?くらい）に紹介してもらえますか。

このように「程度」は、程度用法のクライと類似している点もあれば、異なる点もある。「程度」を用いると大変失礼になる場合もあり、日本語教育の面から見ても問題があると言える。「程度」の程度用法とはどのようなものなのか、クライとの相違点は何か、明確にする必要がある（以下、実質名詞「程度」と区別するため、程度用法の「程度」は、用例以外はテイドと記すこととする）。まず、先行研究を調べてみる。

1.2 先行研究と課題

クライについては川端(2002)、川崎(2012,2014)の研究がある。川崎(2012)は、クライは副詞的修飾成分に位置する場合は高程度に偏るが、それ以外は様々な程度を表すと指摘した。また、川崎(2014)では、クライはニを伴ったクライニとなると、副詞的修飾成分に位置する場合でも、概数量を表す用法として様々な程度を表すことができると主張している。

テイドに関しては、丹羽(1992)と中俣(2012)の研究がある。丹羽(1992)はクライ、ホド、テイドを副助詞と位置付け、それぞれの示す程度の高低について考察した。丹羽は、「高程度」（その程度が高いという評価を表す）、「低程度」（程度が低いという評価を表す）、「適当程度」（ほどほどという評価を表す）、「同程度」（評価を伴わない）、「不定程度」（不定詞に伴う）、「概量」（数量詞に伴う）に分け、「高低評価を伴わない場合は三者いずれも可能で、高低評価を表す場合は、「ほど」が高程度を表し、「くらい」は高程度を表すこともあるが低程度も少なくとも、「程度」は低評価に傾くという傾向を見て取ることができる」（丹羽1992:103）と述べている。テイドの用法としては(4)が挙げられている。

- (4) a. 低程度：山田程度（くらい）の学生ならいくらでもいるよ。（丹羽:101⑥c）
b. 適当程度：病気しない程度（くらい）に頑張りなさい。（丹羽:101⑦a）
c. 同程度：前回程度（くらい）の記録ができれば十分だ。（丹羽:102⑧b）

しかし、丹羽（1992）では用例の調査は行われておらず、テイドとクライの相違に関する議論も見られない。「適当程度」についても詳細な説明がなく、明確であるとは言えない。

一方、中俣（2012）は、話し手から見た程度を表す表現「～程度の」「～ほどの」「～くらいの」を主観的程度表現^[註3]と名づけ、「不適切に使用すると誤解を招いたり、相手の感情を害する（野田2005）危険性がある」（中俣2012: 125）と指摘した。中俣は丹羽の主張を実証するべくコーパス調査を行い、それぞれの表現が高程度を表すか、低程度を表すか、どちらでもないかについて内省により判断した。その結果、「「くらいの」を中立とすれば、「程度の」は高評価には使われず、「ほどの」は低評価に使われない」（中俣2012: 134）と結論付けている。しかし中俣は連体修飾成分の「程度の」のみを取り上げ、その他の成分に位置するテイドは対象としていない。位置する成分によって表す程度が異なる可能性もある^[註4]。また、丹羽の「適当程度」についても言及されていない。

そこで本稿は、程度用法のテイドについて、コーパス調査で改めて実態を観察、分析し、テイドの程度用法とはどのようなものか、実際にテイドはどのような程度を示すときに用いられるのか、クライとの違いは何か、どのように使い分けられいかについて明らかにすることを目的とする。

まず2でコーパス調査を行い、テイドがどのような程度を示す際に使われるのかを観察して丹羽（1992）の主張を検証し、テイドの特徴を探る。3でテイドの特徴についてクライとの比較を通して考察し、4でクライとの使い分けについて述べる。5で結論をまとめ、今後の課題について述べる。

なお本稿では程度を表す用語として丹羽と同様、「高程度」「低程度」を、いずれにも相当しないものとして「中立」を用いることとする。

2 テイドの示す程度の調査とその結果

2.1 成分ごとの調査と結果

テイドの示す程度を確認するため、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を利用し、「程度」という語が位置する成分（格成分、

述語成分、副詞的修飾成分、連体修飾成分）毎に用例を検索し調査を行った。実質名詞の「程度」はもとより、数量詞、疑問詞がテイドの補部である文は考察の対象外^[註5]とした。

まず、テイドが格成分^[註6]に位置する用例を調査した。結果は表1の通りである。「程度」という語を含む用例を検索すると、ガ格は525、ヲ格は515例採集できた。そこから実質名詞の用例を、さらに補部が数量詞、疑問詞の用例を除外したテイドの用例（以下、テイド文と呼ぶ）を取り出したところ、それぞれ38例、14例あった。これらはいずれも（S）abのように中立、低程度と解釈できる文であった^[註7]。ガ格のテイド文は、（S）aのように、後件が「目安だ」「いい」という表現が多数を占めることが観察された。

表1 格成分にテイドが位置する用例の調査結果

	用例の総数	テイド文	その他の文
ガ格	525	38（中立27、低程度11）	補部が数量詞・疑問詞：173、実質名詞等：314
ヲ格	515	14（中立6、低程度8）	補部が数量詞・疑問詞：197、実質名詞等：304

- (5) a. 湯の量は餃子の半分が浸る程度が目安だが、皮の厚さなどで加減を。
 (『danchyu』)
- b. 食欲もない私はほんのツマミ程度を食べた。
 (『マンボウ酔族館』)

次にテイドが述語成分に位置する用例を調査した。結果は表2の通りである。

表2 述語成分にテイドが位置する用例の調査結果

用例の総数	テイド文	その他の文
1796	921 補部が動詞・形容詞：615（低程度591） 補部が名詞：128（全て低程度） 補部が指示詞：107（全て低程度） その他（「同じ」等）：71	補部が数量詞・疑問詞：875

テイド文は921例で全体の51%であり、各成分の中で最も高いパーセントを占めている。そのうち、補部が名詞の用例は128例あったが、全てが（6）aのように事態に対する話し手の低評価を示すと読み取れる低程度の文であった。

また、「この」「その」「あの」「そんな」等の指示詞を補部とするテイド文が107例あったが、(6)bのように、全て低程度と解釈されるものであった。

- (6) a. 交際といっても恋人でも何でもなくて、月に一、二度映画を観たり食事をする程度ですけれどね。 (『最新「珠玉推理」大全』)
 b. 今まで優れていると思っていた人が、この程度だったのかということもわかる。 (『教育再生!』)

次に、テイドが副詞的修飾成分に位置する場合であるが、表3の通りテイド文は見られなかった。「ある程度」という表現が半数以上を占めており、「相当程度」、「一定程度」といった漢語副詞的な表現も散見された。

表3 副詞的修飾成分にテイドが位置する用例の調査結果

用例の総数	テイド文	その他の文
1188	なし	補部が数量詞・疑問詞：457、「ある程度」：688、その他（「相当程度」等）：43

このように、副詞的修飾成分におけるテイドの使用は見られなかったが、代りに「に」を伴ったテイドニという形が多く観察された。動詞を補部とするテイドニの用例を調べたところ、559例採集できた。そのうち、(7)aのような高程度と思われる文は22例のみで、ほとんどが(7)b～dのような高程度以外の文であった。(7)eのように名詞が補部の場合は、135例中、110例が低程度を示すという特徴も見られた。

ここで注目すべきは補部が動詞の否定辞の場合である。補部が動詞の否定辞の用例は559例中、240例あったが、(7)cdのように、丹羽(1992)が指摘した「適当程度」と解釈し得る文が9割近くを占めていることがわかった。

- (7) a. 親族との対立や不和が原因で、円満な夫婦関係が回復できない程度に破綻しており、義父母の虐待や侮辱が、誰がみてもひどいと判断されるような状態でなければ、なかなか裁判では離婚は認められないでしょう。 (『うまく別れるための離婚マニュアル』)

b. にんじんは千切りにし、歯ごたえが残る程度にゆでる。

(『一人分でもおいしいお年寄り家庭料理帳』)

c. 久しぶりなのでケガをしない程度にがんばります。 (『Yahooブログ』)

d. あの～、いままで沢山の方を見ていらして、「こんな事があった！」という実例のような事を、差し障りのない程度に御紹介いただけませんか？ (『しんシン体操』)

e. 夏道がケモノ道程度についている尾根は、まもなくクマザサのジャングルにはいる。 (『山とスキーとジャングルと』)

最後にテイドが連体修飾成分に位置する用例は5829例採集できた。その中からコーパスが無作為に抽出した500例を調査した結果が表4である。高程度も1例見られたが、全体的に(8)のような低程度と思われるものが目立った。

- (8) 頭痛は、(中略)少し気になる程度のものから、激しくて何もできないほどのものまでいろいろである。 (『登山と自然の科学Q&A』)

表4 連体修飾成分にテイドが位置する用例の調査結果

用例の総数	テイド文	その他の文
5829 (うち500例を抽出)	202 補部が動詞：77 (低程度60、高程度1) 補部が名詞：51 (低程度45) 補部が指示詞：54 (全て低程度) その他（「同じ」等）：20	補部が数量詞・疑問詞：194 ある程度：81 実質名詞：23

2.2 調査結果のまとめ

以上の調査結果を表5にまとめる。

表5 テイド文が示す程度の高低 (テイドが位置する成分毎に分類)

程度 \ 成分	格 (ガ格、ヲ格)	述語	副詞的修飾	副詞的修飾+に	連体修飾
高	—	—	—	△	△
低	○	◎	—	○	◎
中立	○	△	—	○	○

(◎：よく見られる、○：見られる、△：若干見られる、—：見られない)

高程度の文はテイドニと連体修飾成分に若干見られたものの、いずれの成分においても低程度が多いことが見て取れる。テイドは丹羽(1992)の主張の通り、低程度に傾くという特徴があることが実証されたと言えよう。特に述語成分に位置する場合や、補部が名詞、「この」「その」等の指示詞の場合は、低程度に偏ることがわかった。

また、テイドは副詞的修飾成分には見られず、様々な程度を表し、副詞的修飾成分に位置する場合は高程度に偏るクライ(川崎2012)とは、この点でも大きな相違が見られる。なお、テイドが副詞的修飾成分に見られないのは、テイドはクライのように副詞化が進んでいないためであると考えられる。しかし、連用修飾のために「に」を伴うと、後件の動詞、形容詞が意味する内容に合わせて、ある程度、自由に程度を表すことができるのではないかと推察される。また、補部が否定辞のテイドニの文には、「適当程度」、すなわち「ほどほど」という評価に解釈できる用例が多く見られることもわかった。

3 テイドの特徴——クライとの比較を通して

2の調査から、テイドの特徴として次の2点が挙げられる。

- ①テイドは低程度に偏る。述語成分、補部が名詞、「この」「その」等の指示詞の場合、特に顕著となる。
- ②否定辞+テイドニは「ほどほど」という評価を表す。

この2点について、クライとの比較を通し、さらに考察を進める。

3.1 低程度のテイドとクライの違い

テイドのみならず、クライも低程度を表す際に使用される。「かすり傷程度(くらい)ですんだ」のように入れ替えも可能である。では、低程度を表す両者の違いは何だろうか。再掲の(4)aと(9)を見てみる。

- (4) a. 山田程度(くらい)の学生ならいくらでもいるよ。 (丹羽:101⑥c)

- (9) 彼のことはよく知らない。たった一度、それも僅か二分ほど、学会で立ち話をした程度(くらい)だ。

(4)aと(9)は、テイド、クライ共に使えるが、(4)aはテイドを用いたほうが「山田」に対する話し手の低評価が感じられる。(9)もテイドのほうが「彼」との関係の薄さが読み取れる。このように、テイドには、話し手の主観的な否定的評価^[註8]が含まれていると解釈できる場合があり、結果、文脈によっては、クライよりテイドのほうがより自然に感じられることがあるようだ。

さらに、「この」「その」と共にテイドを用いると、特に話題の対象を蔑んだり、低く評価したりする話し手の否定的な心的態度が感じられる^[註9]。(10)aは成績が低いのに東大を受験するという相手に呆れる、という内容であるが、クライよりもテイドのほうが、より相手を蔑む話し手の否定的評価が感じられる。

- (10) a. 東大を受験したい? この程度(くらい)の成績でよく言えますね。
b. 政治家は神の如きものでなきゃいけないという期待感があるのかねえ。
とんでもない話だ。この程度(*くらい)の国民なら、この程度(*くらい)の政治ですよ。 (『戦後政治家暴言録』)

(10)bは、国民や政治に対する話し手の低評価を示すもので、クライを用いると意味がわからなくなってしまう。「この程度」からは、対象の人物(国民)、事態(政治)が非常にレベルの低いものである、という話し手の蔑むような、否定的、感情的な評価が読み取れるが、「このくらい」からは、対象の人物、事態の、おおまかな概数量の意味が発生するためであると考えられる。この両者の違いは前掲の(3)bで決定的になる。

- (3) b. お宅にも、このくらい(#程度)のお坊ちゃんがいらっしやいますよね。

クライはその場の状況に応じて年齢や身長の高さ等、概数量を意味するという解釈が可能となるが、テイドは坊ちゃんのレベルは低い、という意味にのみ

解釈されてしまう。そのため、文法的には正しくてもテイドを用いると大変失礼になり、実際の社会において使用すると問題になる。中俣 (2012) でも指摘されているようにコミュニケーション上に「危険性」があると言えよう。

このようにテイドには、クライと異なり、単に度合いが低いという意味だけではなく、話し手の事態に対する否定的、感情的な評価を含意する場合があります、語用論的に注意が必要であると考えられる。

3.2 「否定辞+テイドニ」——適切な限度、範囲を示す

2で、補部が否定辞のテイドニが、「ほどほど」を意味する「适当程度」を表すと解釈できると指摘した。この「适当程度」とは、具体的にどのようなものなのか、クライとの違いは何かについて考察してみる。まず、丹羽が「适当程度」としている補部が否定辞の用例 (4)bを再掲する。

(4) b. 病氣しない程度に (くらいに) 頑張りなさい。 (丹羽: 101⑦a)

(4) bはクライニも使用できるとされているが、テイドニのほうがより適当な語であると感じられる。実際、先に掲載した (7) cdのテイドを (11) abのようにクライに置き換えると不自然な文になる。特に (11) bのような他者への要求文に、より不自然さを感じられる。

(11) a. ?久しぶりなのでケガをしないくらいにがんばります。

b. *差し障りのないくらいに御紹介いただけませんか？

そこで、次の (12) を用いて文法性判断テストを行ったところ、クライよりテイドを用いたほうが自然に感じられるという結果となった^[註10]。

(12) a. 明日は仕事なんだから、二日酔いにならない程度 (?くらい) に飲んでくださいね。

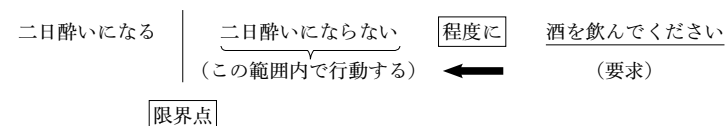
b. A: 親分、こいつ、どうします？

B: 死なない程度 (?くらい) にやっつけておけ。

(12)abは、二日酔いになったり、死んだりすると困るため、そうなる手前で行動を控えるように、そこまでの範囲内に行動を収めるように、という話し手の要求を示す文脈であると解釈できる。

本稿では、このように、「适当程度」のテイドというのは、話し手が、事態の上限を話し手自身の基準で定め、自身をも含めた行為者に、その限度を超えないように、話し手が適切と見做す範囲内で行動するように要求するもの、あるいは、その範囲内で行動したことを述べるものであると考える^[註11]。すなわち、程度の高低を示すものではなく、話し手が適切であると見做す限度や範囲を示すものであると言えよう。「适当程度」と言うよりは、行為の限度・範囲を呈示する用法とも言うべきかもしれない。そして、その限界となるラインを示すのに、否定辞が使われていると考えられる。他者に行為を要求する、あるいは自身の行為を制限する文脈で使用されることが多いため、命令、依頼などの他者への働きかけや、自身の意志表明文に使われることが多い。他者への働きかけの場合は、(13) のような構造の「否定辞+テイドニ+要求文」が成立すると考える。

(13) 「二日酔いにならない程度に酒を飲んでください」



これに対してクライは、概数量を表す (川崎2014)^[註12] という性格が主となるため、限界点を示して限度内の行為を要求する文に使用されると不自然に感じられるのではないだろうか。(12)abを (14)abのように要求ではない文にすると、クライも自然になる。飲酒や暴行の“概数量”を示す意味が発生するためであると考えられる。テイドは限度を、クライは概数量を表すことを主眼としていると言えよう。

(14) a. 二日酔いにならない程度 (くらい) に飲んだ。

b.死なない程度（くらい）にやっつけておいた。

4 テイドとクライの使い分け

以上のテイドの特徴を踏まえ、テイドとクライの使い分けについて述べてい。数量詞を補部とする場合や、中立を表す場合は、両者共に使用できることが多い。しかし、3で見たように、同じ低程度の文でも意味が異なる場合がある。さらに、クライは様々な程度を示すのに対し、テイドは低程度が主であるという相違から、文の意味も自ずと異なることがある。(15)abは、両者共に使えるが、意味が異なるものである。

(15)a.近所を散歩できる程度（くらい）に回復した。

b.回復は、近所を散歩できる程度（くらい）だった。

(15)aは、テイドを用いると、回復はしたが近所を散歩できるだけであり、さほど大きな回復ではないと読み取れる。あるいは、単に回復の度合いを説明しただけであるという中立的な解釈も可能である。一方、クライの場合は、その時の文脈に応じ、高程度（散歩できるまで回復した。すばらしい）から低程度（何とか散歩できるまで、やっと回復した）まで、様々な程度の解釈が可能となる。また、2で、述語成分に位置するテイドは低程度に偏ることが観察されたが、中立にも解釈が可能だった(15)aのテイド文も、(15)bのように述語成分に変えれば、低程度の意味にしか読み取れなくなる。一方、クライは述語成分に位置していても、高程度の意味にも、中立にも読み取れる。

さらに、次の(16)a～cで両者を比べてみる。

(16)a.この程度（くらい）の本

b.イチロー程度（くらい）の選手

c.過労死しない程度（くらい）に働いた。

(16)aで、「この程度の本」と言うと、3.1で述べたように、その本に対する

否定的評価が感じられる。一方、「このくらいの本」は、本の内容の他に、本の大きさを表すこともできる。(16)bも、「イチローくらいの選手」と言った場合、イチローのレベルは低いものから、同等のレベル、高いレベルまで使用することができ、「イチローくらいの選手となると年取も桁違いだ」などの高評価の文も可能である。一方、「イチロー程度の選手」と言うと、「イチロー」のレベルは低いものであると解釈され、後に続く文は、「イチロー程度の選手はどこにでもいるよ」等の低評価の文脈となる。2で観察されたように、名詞を補部とするテイドは低評価に傾くようである。また、(16)cは、両者共に使用できるが、3.2で述べたように、テイドは働く限度の呈示を主眼としているのに対し、クライは働く量の呈示を主眼としていられる。後件を「働きなさい」のように要求文にすると、テイドのほうがふさわしくなる。

5 まとめと今後の課題

以上、本稿では程度用法のテイドについて観察、考察を行ってきた。程度用法におけるテイドの特徴並びにクライとの違いを以下の3点にまとめる。

- 1) クライが高程度をはじめ、様々な程度を表すのに対し、テイドは低程度に偏り、特に述語成分に位置する場合や「この」「その」、名詞を前接する場合は顕著となる。したがって、文中のテイドとクライは、置き換えが可能であっても異なる意味を示すことがある。
- 2) 低程度を表すテイドには、単なる度合いの低さのみならず、話し手が事態の価値が低いと見做す否定的な感情・評価の意味が含意されることがあり、場合によってはコミュニケーション上に問題が発生する恐れがある。クライも低程度を表す文に用いられるが、概数用法との連続性も見られ、そのような過度な否定的評価は含意されない。
- 3) テイドは否定辞を補部に持ち、話し手が適切と見做す限度を設けて、その範囲内に事態を留めるという話し手の要求的意味を表すことができるが、クライにはそのような用法はない。テイドが限度、範囲を表すのに対し、クライは概数量の呈示が主眼となる。

日本語教育への発展としては、テイドの限度を設ける用法を文型として日本語学習に取り入れることが考えられる。このような場面での適切な表現として役立つのではないだろうか。また、クライと置き換えると意味が変わってくることや、テイドを用いた場合、蔑み等の否定的評価が含意される恐れがあることなどは、テイドの導入時に注意すべきことであろう。

以上、本稿では程度用法のテイドについて述べてきたが、今回は、テイドが低評価への方向性を迎った要因の考察までは至らなかった。これについては、Ullmann (1962) の「意味の墮落的傾向」^[注13]やHopper & Traugott (2003) の「意味の狭化」^[注14]が有効な理論であると考えられ、これらの理論との結びつきが今後の課題となっている。「この程度」と低評価との関係についてもさらなる研究が必要である。併せて今後の課題としたい。

〈京都府立大学 (学術研究員)〉

注

- [注1] …… 陳 (2014) は、日本の文献で「程度」という文字列が確認できたのは18世紀末であるとし、「規定・規範」の意味から「範囲」の意味を経て現在の垂直的な「水準」「基準」を示す意味へと変化していったと推測している。
- [注2] …… 程度用法とは、主文に現れる事態の程度・量・頻度を、比喩や具体的な例を引き合いにして表す用法、概数用法とは数量詞についておおよその数量を表す用法であるとする。クライとグライは区別せず、クライとのみ表記する。
- [注3] …… 中俣は、「話者がその量を多いあるいは少ないと捉えていることを伝える(が伝わる)表現」(中俣2012:125)と定義づけ、「語の持つ客観的な意味を上書きする」としている。
- [注4] …… 実際、クライについては、副詞的修飾成分に位置する場合、他の成分とは異なり、高程度に偏ることが観察されている(川崎2012)。
- [注5] …… 連体修飾成分に関しては中俣(2012)の調査があるが、本稿では中俣とは異なり、数量詞を対象外としたため、改めて調査を行った。
- [注6] …… 今回は議論の複雑化を避けるため、ガ格とヲ格のみを対象とした。
- [注7] …… 高低は文脈から判断している。この判断は内省によるため誤差の発生は否めないものの、傾向を明らかにする手段となり得ると考える。
- [注8] …… クライは、「失恋したくらいで泣くな」など、とりたてて用法では話し手の否定的評価を表すことがある。しかし、今回は程度用法について論じているため、これについては議論の対象としない。
- [注9] …… 「このバカ」「この野郎」など、相手を罵る際に、名詞と共に「この」が使わ

れることがある。対象を指し示す眼前指示の機能は薄れ、否定的な感情を発露、強調する効果があるようだ。名詞を伴わない「このー!」という罵声もある。「こんな」「そんな」が否定的、感情的な評価を表すことがあるが、それに共通する要素が「この」「その」にもあるとも考えられる。

[注10] …… (12)abは、2012年3月17日に文法性判断テスト調査を行った。調査対象は日本語教育関係者10名である。自然、不自然、判断しかねる、という評価をそれぞれ1点、0点、0.5点で計算し(それぞれの得点を回答数で割り、100を掛ける)、許容率を算出した結果、(12)ab共に、テイドは100%(自然10名)、クライは45%(自然:3名、不自然:4名、判断しかねる:3名)であった。許容率の計算方法は『類似表現の使い分けと指導法』(日本語誤用例研究会1997:216)による。66.6%以上を自然、33.3%未満を不自然としている。

[注11] …… 実質名詞「程度」の用例に、「物事には程度というものがある」という言い方があるが、この「程度」は限度、上限を意味している。この意味合いが、テイドにも影響を与えていると思われる。

[注12] …… 川崎(2014)では、副詞的修飾成分に位置する場合、クライは副詞的用法として高程度を示すが、ニを伴ったクライニは名詞的用法として様々な概数量を示すとしている。

[注13] …… Ullmann (1962)は、意味の墮落的傾向は言語では極めて普通のものであると述べ、要因としてえん曲表現、連想、偏見を挙げている。

[注14] …… Hopper & Traugott (2003)は、語彙項目は同義語衝突を避けて下位のタイプに意味が狭化される、という語彙の意味変化における意味の狭化を指摘している。「程度」は明治以降、事態の程度を表すようにもなったが、既に程度を表す語としてホド、クライがある。ホドは高程度に傾き、クライは様々な程度を表す(川端2002)。「同義語衝突」を避けるために、テイドは相補分布的に限度や否定的低評価を表す、低程度へと狭化されたとも推測できる。

参考文献

- 川崎一喜(2012)「副詞的修飾成分「くらい」の程度用法に関する考察」『和漢語文研究』10, pp.29-44. 京都府立大学
- 川崎一喜(2014)「程度を表す「くらい」の助詞後接形「くらい+α」に関する考察—「くらいに」を中心に」『KLS』34, pp.73-84. 関西言語学会
- 川端元子(2002)「程度副詞相当句(節)「Pほど」について」『日本語教育』114, pp.40-49. 日本語教育学会
- 陳贊(2014)「程度：回帰借語としての可能性」『関西大学東西学術研究所紀要』47, pp.183-206. 関西大学東西学術研究所
- 中俣尚己(2012)「主観的程度表現について—「～程度の」「～ほどの」「～くらいの」を中心に」『日本語教育連絡会議論文集』24, pp.125-134. 日本語教育連絡会議
- 日本語教育誤用例研究会(1997)『類似表現の使い分けと指導法』アルク

- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44(13), pp93-128. 大阪市立大学
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- Hopper, P.J. & Traugott, E. C. (2003) *Grammaticalization*. Cambridge University Press. (日野資成 (訳) (2003) 『文法化』九州大学出版会)
- Ullmann, S. (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning* (池上嘉彦 (訳) (1969) 『言語と意味』大修館書店)